

申請者:西村 三保子

論文題目: 管理会計情報共有のマネジメント

審査員 挽 文子
田中 一弘
尾畑 裕

本論文は、従来の管理会計研究においては管理会計の認識・測定システムの側面に比べて伝達システムの側面に焦点を当てた研究が十分ではないという問題意識のもと、管理会計の伝達システムの側面に目を向けて、企業とそれを取り巻くステイクホルダー間の信頼関係を構築し、価値創造をもたらすような管理会計情報共有のマネジメントを検討している。まずは、日本企業における企業と株主・投資家間の管理会計情報共有の実態を、一般に入手可能なデータ、郵送質問票調査およびインタビューを通じて明らかにしている。次に、自らが提示した、従業員と株主・投資家それぞれの視点の分析フレームワークに基づき、管理会計情報共有のマネジメントに関して事例研究を行っている。事例研究は一般に入手可能なデータ、内部資料、インタビューを通じて行われたものであり、従業員の視点では京セラ、キャノン、カゴメ、株主・投資家の視点ではキリンビール、カゴメを取り上げている。

本論文の評価できる点として、次の3点を挙げるができる。

第1に、伝統的に、管理会計は企業の経営管理者向けの会計問題、財務会計は企業外部の利害関係者向けの会計問題を研究対象としてきたが、近年、企業外部の利害関係者のためだけに認識・測定・伝達される財務報告に対して多くの批判が向けられている。本論文では、企業内のみならず株主・投資家の視点をも射程にいれて管理会計の伝達システムに焦点を当てた管理会計情報共有のマネジメントを検討している。これは、独自性が高くかつ野心的な試みである。

第2に、研究書のみならず雑誌、企業の実務家が執筆した文献のレビュー、郵送質問票調査、インタビュー調査に加え、内部資料の収集など、多様な方法を通じて日本企業の管理会計情報共有のマネジメントの実態を明らかにしようとした点が評価できる。

第3に、上述した野心的な試みにおいて、管理会計研究者の立場から、企業の経営に適切な企業と株主・投資家の管理会計情報共有によるマネジメントを論じた点である。

本論文には問題点もある。特に惜まれる点は、従業員の視点と株主・投資家の視点とを基本的には統一的なフレームワークで説明しようとしたがゆえに、それぞれの視点に固有の論点が捨象されてしまった危険があることである。また、第二部全体として時系列の比較を試みているような印象を与えるが、調査方法が同一でないこともあり、無理にそのような説明をする必要はなかった。

このような問題点も残されているが、本論文はこれらを補ってあまりある評価をできる内容を有している。よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。